



TITLE:

小農經濟理論より見たる地代

AUTHOR(S):

山岡, 亮一

CITATION:

山岡, 亮一. 小農經濟理論より見たる地代. 經濟論叢 1935, 40(2): 476-482

ISSUE DATE:

1935-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130552>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 貳 第 卷 十 四 第

行 發 日 一 月 二 年 十 和 昭

論 叢

第三史觀の概念……………

文學博士 米田庄太郎

地方間課税に於ける住所對財源……………

法學博士 神戸正雄

地方財政調整指數……………

經濟學博士 汐見三郎

時 論

増税は景氣の芽を摘むか……………

文學博士 高田保馬

貿易統制としての爲替清算制……………

經濟學博士 谷口吉彦

研 究

フランスの獨立償還金庫に就いて……………經濟學士 松岡孝兒

貨幣自體の限界效用……………法學士 正井敬次

說 苑

公債制度の社會的條件に就て……………經濟學士 島 恭彦

小農經濟理論より見たる地代……………經濟學士 山岡亮一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

小農經濟理論より

見たる地代

山岡 亮一

一 小農經濟理論の概念

こゝに考察せんとする小農理論は純形式的にはラウル・ダビッドの小農優越論に類似して居るが、その本質に於ては兩者は全く相違して居る。實に小農理論はロシア獨特の理論として、その特殊なる社會經濟の地盤の上に發生した。従つて斯る地盤の上に立つロシア農業の特殊性を理解して、始めて小農理論の本質を完全に把握し得る。而してロシア農業の特殊事情とは、(一)自給自足農民による小土地所有の優位、(二)低位なる工業發達の微弱なる人口吸引力に基く農村人口の過剩、(三)政府の經濟政策上より行はれたる農業生産力の發展阻止之である。

かゝる農業事情は、從來の經濟理論を以て説明し得ざる小作料、地價等の現象を惹起した。¹⁾こゝに小農理論は、斯る現象を説明すべき任務を帯びて、從來の農業經濟理論に對する不満より發生した。斯かる小農理論の基礎建設者はブルガコフであり、更に之を發展せしめたるものはチエリンチエフ及びチャヤノフである。スツデンスキによれば小農理論は二個の根源を持つ、²⁾即ち限界效用學說の意味に於ける勞働、消費均衡の概念及びリカルドオによる最低生存費概念である。前者はチャヤノフ、後者はチエリンチエフの理論の礎石をなす。茲にチャヤノフの心理的主觀的基礎づけによる小農理論を問題とする。

チャヤノフはその出發點として小農の強靱性や抵抗力を問題とし、結局之は小農の技術上の優越に基くものでなく、生産が賃勞働の使用を伴はず、家族によりて行はれると云ふ一種の私經濟の本質より生ずる經濟的社會的特異性によるものとなす。³⁾従つて恰も資本主義社會の分析に際しては純資本家の經營を想定する如

- 1) J. Schirkowitsch, Ideengeschichte der Agrarwissenschaft in Russland. (Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 27.) S. 105.
- 2) a. a. O. S. 104.
- 3) a. a. O. S. 104.
- 4) G. A. Studensky, Die ökonomische Natur der bauerlichen Wirtschaft. (Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 28.) S. 321.

く、こゝでは賃労働者なき純粹の家族經濟を假定して分析を進めて行く。この研究方法を彼は家族經濟の純粹培養と稱して居る。⁵⁾彼の云ふ所によれば、近代國民經濟學に於ては、専ら資本家的經濟を對象として其の理論が樹立されて居り、總ての非資本家的經濟は注目に値せぬもの、或は死滅に瀕せるものとして、それが現代資本主義經濟の基礎地盤に及ぼす影響は無視されて居る。

併し我々の經濟的思惟は單に資本家的經濟思惟のみよりなるものではない。蓋し經濟活動中の大いなる部分、即ち農業生産の大部分が資本家的經營でなく、全然それとは異つた賃労働者なき家族經濟の基礎の上に建てられて居るからである。⁶⁾そこには經濟行爲に對する全く特異なる動機と特殊なる勞動概念とが一つになつて居る。

賃労働者なき農家經濟の特殊性よりして、勞動收益（粗收益より物的支出を差引きたる殘額）の大きさは、農家家族の規模と構造（消費家族員に對する勞動家族員の割合）と

によりて決定されるが、更にそれは勞動の緊張度の如何、即ち勞動の自己搾取の程度如何によりても決定される。而してこの勞動の自己搾取の程度は、家族欲望充足度と勞動苦痛度との主觀的均衡によりて決定される。⁷⁾即ち一方獲得せられたる生産物數量の増加に伴ひ、各附加量に對する效用の主觀的評價は益々低下するが、他方それが獲得に伴ふ自己搾取の擴大により獲得の苦痛度が益々増加する。かくて兩要因間の主觀的評價に均衡狀態が表はれる。勞動の苦痛と效用との均衡に關する主觀的説明方法が、農家經濟の打算方法に特性を與へる。⁸⁾

二 小農理論に於ける地代說

以上の説明により小農經濟理論の根本概念は之を説明し得たと信ずるから、更に進んで斯る基本概念が地代範疇の解明に際し如何に適用されるかを考察しよう。チエリンチエフはチャヤノフに一步先んじ「小農經濟にも地代ありや」なる題下に、小農に於ける地代

5) A. Tschajanow, Die Lehre von der bäuerlichen Wirtschaft. S. 6.

6) a. a. O. S. 8.

7) A. Tschajanow, Zur Frage einer Theorie der nichtkapitalistischen Wirtschaftssystem. (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 51.) S. 577, S. 578.

8) Frauendorfer, Sind Bauernbetriebe kapitalistische Unternehmungen? (Landwirt-

に就て研究を試みた。¹¹⁾ 彼によれば資本家的農業經營に於て地代が成立する處に於ては、農家經濟に在つては土地の收益の増大によつて、より多くの家族員を養はんとする。¹²⁾ 換言すれば之は消費の増大を意味する。チヤノフはこのチエリンチエフの見解を一層深く究明してゐる。曰く、チエリンチエフの如く單に消費の増大を示すといふだけでは、農家經濟に於ける地代發生の契機を充分に説明するものではない。¹³⁾ 即ち農家經濟に於ける收益の増大は、勞働緊張度の輕減或は資本構成力の増大に導き、直ちに地代そのものの成立を齎さないからである。

彼は農家經濟に於ける地代論の建設に際し、資本家的農業經營に於ける差額地代發生並に其の差額の決定に參與するところの地代構成要因が、¹⁴⁾ 賃勞働者なき經濟に於て如何なる役割を演ずるかを究明する必要があると考へた。

農家經濟が從來よりもより豊沃なる土地を耕すか、或は市場に對してより好都合なる場所にある土地を耕

す場合には、(一從來よりも物的資本及び勞働の投下を減じて、しかも従前と等量の總收益を得るか、(二従前と等量の物的資本及び勞働を投下して、従前よりもより大なる總收益を得るか何れかである。以上何れの場合にも、農家經濟にとりて、より好都合なる地代發生事情は、勞働單位當りの收益を増加せしめるものである。勞働單位當りの收益が増大する場合には、勞働苦痛度と欲望充足度との均衡が移動して、新なる従前より苦痛度のより小なる所に均衡點を生ずる。新しい機械が使用され、又は生産物に對する市況が活氣を呈する場合にも同様なる現象が起る。¹⁵⁾ 資本家的農業經營に於ける差額地代發生の要因として、市場への利便、土地の沃度をあぐるを例とするが、純現物經濟の支配的なる處に於ては、¹⁶⁾ 第一の要因は作用せず、従つて地代が發生するとしても、それは土地の沃度からのみ生ずる。而して斯る場合、價格といふ範疇が無いから、ただ現實には收穫物數量の増加を來すか或は勞働緊張度の低下を齎すかであり、この際、生活欲望の充足が

schaftliches Jahrbuch für Bayern, 1927, S. 165 ff.) に於て上の二つの型の外面的相反につき完全に近く分析されて居る。

Tschajanow, Die Lehre. S. 35.

9) a. a. O. S. 38.

11) a. a. O. S. 112. J. Schirkowitsch, Ideengeschichte. S. 116. Tschelinzeff の四命題參照。

充分なる時は、勿論後者、即ち勞働緊張度低下が選ばれる。併し農家が生活擴大の壓迫に耐へ得ぬ時は、收穫の増加を選ぶであらう。チャヤノフの農家經濟理論にあつては、地代發生要因によりて影響を受けるものは、家族消費豫算、農家の資本構成、勞働の緊張度の三つの實在的範疇である事は明かである。

農家經濟の市場關係への参加を幾分認める限り、地代構成要因の一たる市場への位置の利便も亦作用する。この要因が以上の三範疇に如何なる影響を與へるであらうか。勞働單位當りの收益増加により勞働の緊張度が幾分減するにせよ、尙ほ年勞働收益の増加を見る場合、それは特殊の均衡式¹⁷⁾、即ちこの收益増加を資本構成に向けることによつて生ずる現在の消費抑制による苦痛度と、他方現在それを資本構成に向けぬ場合に生ずる將來の勞働苦痛度の増加との比較により、この勞働收益の家計的消費或は資本構成への配分が決定される。勞働單位當りの收益の増加に伴ふて、年勞働總收益の増加を來さない場合は、それだけ勞働苦痛度

が従前より減退したからである。農家がより、高き地代を生ずる土地の耕作に移る場合にも資本家的經營に於ける如く、必ずしも地代の増加となりて現はれない。それは農家經濟に於ては、地代部分が直接消費の増大に向けられ、從て一般に勞働單位當りの收益増加に伴ふて、年勞働收益の増加を見ないからである。即ち農家經濟の内部的均衡は、より、低度なる生産狀態に相應する點に於て成立することとなる。この場合農家經濟は、その經營組織から比較的僅少の勞働收益を生ずる仕事を除去して、その勞働總量を減する事が出来る。¹⁵⁾所謂農民を四分の三人力の男 (Mann der Dreiviertelk-
三)と呼ぶのは、農家が一般に勞働投下可能の限界迄、勞働せぬ事を意味するものである。

以上の考察の對象となつたものは小作料を支拂ふ必要なき自作農的家族經營であつたが、更に一步を進め、地主より小作的家族經營が土地賃借をなす場合を問題とするならばより、高き地代を生ずる土地に移る場合に、農家經濟が資本家的地代と等量の地代(現實には小作料)

- 12) Studensky, Die ökonomische Natur. S. 321.
- 13) Tschajanow, Die Lehre. S. 113.
- 14) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gonner's ed., p. 47.
(堀氏譯本92頁)参照。
- 15) Tschajanow, Die Lehre. S. 113.
- 16) Vgl. a. a. O. S. 116.

を支拂ひ得るためには、従前と同様の生活程度と勞働の精勵度とを保たなければならぬ。

次に高き地代を生ずる土地より低き地代を生ずる土地に移る場合、又謂はば負^{マイナス}の地代を生ずる場合につき考究し、合せて小作的家族經營に於る地代（小作料）支拂の可能性につき検討しやう。農家經濟の特徴の最も明瞭に表はれるのは、チャヤノフによれば、¹⁹⁾勞働投下のより、不利なる條件を忍んでも、年勞働收益の増加を圖る場合であり、地代關係より云へば、より、低い地代を生ずる土地に移る場合である。即ち農家經濟の特徴は、勞働年總收益への關心が、勞働單位當りの收益増加への關心よりも、より、強い烈度に現はれる場合に發揮される。この際、粗收益から物的支出及び勞賃を控除したる資本家的利潤の剩餘たる意味に於ける地代が家族經濟に於て生じないのは、農家經濟の粗收益から右の物的支出と評價勞賃（自家勞力に對する）とを差引けば、負^{マイナス}となるからである。²⁰⁾

資本家的農業經營に在りては、その適當なる經營集

約度には一定の限界がある。この點を超えて更に集約度を高める場合には、收穫遞減法則の作用を受けて、投下資本の收益は減退し、從つて資本家的採算がとれないこととなる。之に反し農家經濟では、自家勞力に依存する關係上、家族員の消費欲望に刺戟される場合は、資本家的經營の採算點を超えて、その集約度を高め、從て勞働單位當りの收益を低下し乍ら、年勞働總收益を増加することが可能となる。²¹⁾例へばラウルによれば、²²⁾スイスの農家經營では、資本家的經營よりも、その集約度を三倍にする場合すらある。かゝる場合、勞働單位當りの收益から見れば、農家は明かに損失をすることとなるが、その使用勞力は自家勞力である關係上、實質的な損失はなく、他により、有利に勞働を投下する機會がなければ、かゝる極度の農家經營の集約化によりて、地代（小作料）を支拂ひ乍らその家族員を養はなければならぬこととなる。

上述の如く、資本家的農業經營に於ては地代が生ぜざるか、又はそれが負^{マイナス}となる場合に於てさへも、農

17) a. a. O. S. 85 ff. 勞働收益の家計的消費或は資本構成への配分決定には一定の目盛が存する。
 18) a. a. O. S. 114.
 19) a. a. O. S. 41.
 20) Tschajanow, Zur Frage. S. 587.
 21) a. a. O. S. 586.

家經濟に於てはその特殊なる打算方法、即ち勞働及び消費の主觀的均衡によりて、その存續を維持し、しかも地代(小作料)の支拂にさへ堪へ得るものである。この農家經濟に於ける過大なる經營集約度は「偽集約度」(Pseudointensität)と稱せらるる不合理なる勞働投下に基づくもので、²³⁾ 評價的、簿記的地代は益々低下し、資本家的經營より見たる負の^{マイナス}地代發生の可能性は益々大となる。

この場合、より、高き地代を生ずる土地より、低き地代を生ずる土地に移るのであるから、以前と等量の勞働收益を獲得するためには、勞働の自己搾取を一層高めなければならない。茲に於て勞働苦痛度と欲望充足度との主觀的均衡點は移動して、以前よりも苦痛度の大なる點に於て定まる。

理解の便宜のために數字によつて例示するに、²⁴⁾ 典型的なる資本家的農業經營に於ては、農企業家は農業勞働者を雇傭し、地主より農地を賃借して經營を行ふ。この場合、一應絶對地代を考慮外に置き、差額地代の

みを問題とする。然らば限界地に於ける農業經營は次の結果を示す。今一デシヤチンの農地が六十ブードの燕麥を産し、燕麥一ブードの價格を一留とし、この燕麥六十ブードを生産するに、二十留の物的支出と二十五日の勞働日とを要し、一日の勞賃を一留とする。然らば次の計算となる。

資本家的農業經營			農家經營		
粗收益	六十留		粗收益	六十留	
物的支出	二〇留		物的支出	二〇留	
勞賃	二五留		勞働收益	四〇留	
農企業利潤	一五留		地代(小作料)は勞働收益		
地代	〇		中より支拂はれる。		

この場合、資本家的經營に於ては、農業の利潤は十五留であるが、地代は零である。而してこの資本家的農業經營が存續するためには、この十五留は平均利潤でなければならぬ。

然るに農家經濟に於ては、消費欲求と勞働苦痛との主觀的均衡によりて、勞働收益中より地主に若干の地

22) Tschajanow, Die Lehre. S. 66.

23) G. A. Studensky, Intensität und Pseudointensität in der russischen Landwirtschaft (Berichte über Landwirtschaft, neue Folge VI, Heft 2.) S. 229.

24) Die Lehre. S. 39-40 の例より數字を借りた。

代（小作料）を支拂ふことが出来る。

要之、資本家的農業經營に於ては地代を生ぜざる場合に於ても、雇傭勞働を伴はざる農家經濟に於ては、勞働苦痛と消費欲望との内部的、主觀的均衡狀態の如何によつて、地代（小作料）を支拂ひ得るものである。

但しその前提條件としては、農家經濟がより、高き地代を生ずる土地に移る場合に於ても、その欲望充足度（生活程度）を從來よりも引上げざることを必要とし、更により、低き地代を生ずる土地に移る場合には、その欲望充足度を從來よりも更に一層低下せしめることが必要である。チャヤノフの小農理論によれば、之が農家經濟に於て、地代（小作料）の支拂ひを可能ならしめる機構である。

以上によりチャヤノフの小農經濟理論に於ける地代論を紹介したるが、この場合農産物價格が一定であると假定されてゐるが、それが限界地に於ける資本家的農業經營の生産費によりて決定されるのであるか、又は限界地に於ける小農經營の生産費によりて決定され

るのであるか、この點に關して何等の説明も加へられてゐない。また更に資本家的經營と小農經營とが並び存する場合、限界地に於ける兩者の競争關係、並に交代關係の如何についても別段述べるところがない。これ等の諸點を更に加味して、小農論に於ける地代論を完成することが、尙ほ將來の課題として殘る。從來の地代論が凡て資本家的經營を根柢として構成されてある今日、杜撰ながら小農經濟を基礎として地代論を樹立せんと試みたるチャヤノフの見解は、特に小農の支配的な我國に於ては、その高率小作料を説明する上に一顧に値するものではあるまいかと考へられる。